

「地域経営」という 新しい学問分野を 学生たちと切り拓く



経済経営学類 准教授 (博士)

則藤 孝志

NORITO Takashi

食と農で地域を
つなぐ理論の構築

研究室 URL <http://kojingyoseki.adb.fukushima-u.ac.jp/top/details/328>

[専門分野] フードシステム論 食と農の地域経済学

【プロフィール】 京都大学大学院農学研究科博士課程修了 (博士[農学])。フードシステム論が専門。最近では食と農を基軸とした地域づくりの仕組みに関する研究に力を入れています。ここでは、自治体や地域づくり組織と連携しながら調査研究を進めています。

研究の専門は、フードシステム論と地域経営論です。フードシステムとは食料の生産から消費に至るプロセスの仕組みを捉える概念です。このフードシステムを構成する農業と食品産業 (食品製造業、食品流通業、外食・中食産業) は、地域経済を支える重要な産業群です。そこに観光業や医療・福祉部門、教育部門も加わって、商売と交流でにぎわう地域経済 (地域フードシステム) をいかにして築いていくか、それをどうマネジメント (地域経営) していくか、これが私の中心的な研究テーマです。

昨年度 (2017年度) から、私のゼミでは猪苗代町をフィールドにして現地の地域づくり青年組織 (NPO法人・猪苗代研究所) と協働で地域を盛り上げるプロジェクトを進めています。NPO法人・猪苗代研

究所 (通称・いなラボ) は地元の青年会議所、商工会青年部、農青連 (農協組織) などの青年らが職域を超えて参集し、食と農を基軸に町の活性化を実現するために自ら立ち上げた組織です。このような地域横断的な組織が持続的に発展するためにはどのような課題や難しさがあるのか。それを乗り越えるための要点は何か、そこに大学はどのような役割を果たすべきかを探求しています。合わせて今年度 (2018年度) からは郡山市や川内村と連携して、ワインを核とした地域づくりと産地形成に関する調査研究を開始しています。これらを探求しながら、地域・現場に立脚した地域経営の理論構築を学生たちとめざし、成果を広く発信していきたいと考えています。



研究概要

震災と原発事故から7年、福島県はいま、復旧段階を経て、将来を見据えた地域づくり・産業づくりの段階に入っています。今後豊かな地域経済を築いていくためには、基幹産業の1つである農業の再生に加えて、農業と食品産業、関連部門とのつながりを地域内で取り戻し、強化していくことが求められています。これら「地域の6次産業化」の継続・発展メカニズムを探求するとともに、地域-日本-世界に広がる現代フードシステムの構造分析も行っています。



こんなこと
できます!

農工商連携や6次産業化、地産地消の取組みをサポート

想定するパートナー

農業生産者、農協、自治体、食品事業者、流通業者、地域づくり組織

具体的な連携、事業化のイメージ

地域ぐるみで農工商連携や6次産業化、地産地消を育む体制の構築と事業実践

これまでの取組事例

郡山市、南会津町、只見町、国見町、猪苗代町などをフィールドに自治体や企業と連携して調査研究を行い、①事業者の経営理念、②協同組合、③技術革新、④行政支援を組み込んで「地域づくり」に活力を与えていくような仕組みを食農連携の継続・発展モデルとして提案しています。

関連情報

則藤孝志 (2015) :食と農で地域をつなぐ協同のあり方—真の地産地消と6次産業化を問う—『協同組合研究』第35巻第1号 (13-20頁)

則藤孝志 (2015) :原子力災害後の福島県が抱える流通問題と地産地消を取り戻す意義—風評問題への流通アプローチ—『にじ』2015年冬号 (121-129頁)

私たちの研究室自慢!

「地域・現場から学ぶ」。これが研究室のモットーです。8月に開催された音楽イベントでは、猪苗代町の魅力を「フェス飯」で表現・発信する活動を行いました。現場で見たこと、聞いたこと、感じたことを大切に地域経営の実践理論を学んでいます。(ゼミ長: 安田峻さん)

